13 稀有なSolitary bone cystの1症例

○牧　憲司、内上堀征人、竹下尚利、
秀島　治、村田真知子、名越恭子、
木村光孝

九歯大・小児歯

Solitary bone cystは一般に長管骨、特に上腕骨、大腿骨、脛骨などに好発し、顎骨に発生することは少ないとされている。一般的にSolitary bone cystの臨床的症状はなく、X 線診査で偶然発見される場合がほとんどである。しかも、この疾患はX 線所見で境界不明瞭な単房性X 線透過像を呈し、歯列直下の大きなものは、帆立貝状の形態を呈する。最近演者らは下顎枝にatypicalなX 線透過像を呈し、珍しい臨床経過をたどった症例を経験したので報告する。

初診時の年齢は、10才代から20才代の若年者に多く、性別では男性にやや多いとされている。Heabner らの報告によると、無症状のものが61%、腫脹を呈したものが24%であったと報告している。本症例は14才の男性であり臨床所見では腫張が認められた。

発生部位による分類では、Gardner らと池島らはその90%が下顎に発生すると述べている。またHoweは下顎前歯から大臼歯の乳歯列直下に比較的多く発生する傾向があると報告している。今回報告する症例のように下顎枝に発生する頻度は非常に少ない。

X 線所見については、本症例は多房性でしかも隔壁がやや直線状を呈するX 線像であり文献的に述べられている所見とは異なる。

Solitary bone cystの処置については、屋形らは開窓療法を主張し、岩崎らは外科的摘出療法が必要であると述べている。

下顎枝における多房性のX 線透過像の鑑別診断として、Odontogenic Keratocyst、ameloblastoma odontogenic fibromyxoma、aneurysmal bone cyst なども考えなければならないが、臨床症状の程度および骨膨隆の状態から、ある程度は鑑別できる。今回遭遇したような症例は大変稀有なる症例である。

14 乳前歯５本の外傷による完全脱落、24時間後再植の一症例

○本多直嗣　角町正勝

角町矯正小児歯科医院

小児歯科臨床において、乳歯又は幼若永久歯の外傷により破折、嵌入、脱臼、脱落等を見ることは多い。これまでも、外傷による完全脱落症例報告は数多くあったが、今回私どもも、外傷による多数乳前歯（C－|－B）完全脱落症例を経験した。

患児は、受傷時１才８ヶ月の女児で、母親への問診によれば、「５、６段の階段（約1.2 m）より落下、３本完全脱落、２本完全脱臼の状態でかろうじて歯肉に付着していた。直ちに、某診療所に行くが、保存不可能と診断、５本とも抜歯縫合された。」とのことだった。翌日、当医院に来院。某診療所のゴミ箱に廃棄されていた歯牙を回収し、受傷後約24時間経過していたが再植術を試みた。

５本とも乾燥しきっていたが洗浄後、ビタペックス根充を行った。完全萌出歯はD－|－Dの状態で固定源となる歯牙が少ないため、グラスアイオノマー固定も併用してレジン床副子固定をした。

1988年5月16日固定を開始した。固定後１カ月目までの間に２回レジン床が脱落し再固定を行った。さらに、固定後２ヶ月目過ぎた7月25日 に再び転倒し打撲のためレジン床が脱落し再固定を行った。そして、最終的にレジン床を8月30日 に除去した。通算固定期間は、約３ヶ月であった。結果５本とも固着した状態で完全に再植できた。固定後約２年経過しており、その間順次歯牙が脱落していき現在１本残存している状態であるが、再植の経過とその予後を供覧報告する。